

六 修禪鍛鍊の勝海舟

幕末の偉人、勝海舟の如きは、精神を鍛鍊して不動智を研ぎ、臨機應變の自在を得たる人であります。その修業は全く劍術と禪學の二道より得たのでありまして、毎日の稽古は勿論、王子權現に行つて、熱心に夜稽古をしたものである。その修禪の模様に就いては、勝海舟自ら云うて居られる。

彼の島田と云ふ先生が、劍術の奥意を極むるには、先づ禪學を始めよと勧めた。それでたしか十九か二十の時であつた。手島の廣徳寺と云ふ寺に行つて禪學を始めて、大勢の坊さんと禪室に座禪を組んで居ると、和尚が棒を持ち來り、不意に座禪して居る者の肩を叩く。すると片端から仰向に倒れる。なに皆が座禪しても、錢の事やら、女の事やら、甘い物の事やら、色々の事を考へて、心が何處にか飛んでしまつて居る。そこを叩かれるから、吃驚してころげるのだ。老爺なんかも、始めは此のひつくり返る連中であつたが、段々修業が積むと、少しも驚かなくなつて、例の如く肩を叩かれても、只僅に目を開いて視る位の所に達したからして、殆ど四ヶ年間眞面目に修業した。此の座禪の功と劍術の功が、老爺の土臺となつて、後年大層爲になつた。瓦解の時に萬死の境を出入して、遂に一生を全うしたは全く此の二つの功であつた。あの時分澤山刺客やなんかにひやかされたが、何時も手取りにした。此の勇氣と膽力は、畢竟此の二つに養はれたのだ。危難に際會し、逃れぬ場合と見たら、先づ身命を捨てゝかゝつた。そして不思議にも一度も死なゝかつた。こゝに精神上の一大作用が存在するのだ。人一たび勝たんとするに急なる、忽ち頭熱し胸跳り、措置却て顛倒し、進退度を失するの患ひあるを免るゝ能はず。若し或は退いて防禦の位置に立たんと欲す、忽ち退縮の氣を生じ來つて、相手に乗ぜらるゝ事、大小となく此の規則に支配せらるゝのだ。

老爺おれは此この人間精神にんげんせいしんじやう上の作用さようを悟ごりやう了りやうし、何時いつも先まづ勝敗しょうはいの念ねんを度外どぐわいに置き、
虚心坦懷きよしんたんくわい、事變じへんに處しよして。それで小せうにしては刺客亂暴人しかくらんぼうにんの厄やくを免まぬがれ、大だいにし
ては瓦解前後ぐわかいぜんごの難局なんきよくに處しよして、綽々しゃくくとして餘地よちを有たもちたりき。是これ畢竟ひつきやう、劒けん
術じゆつと禪學ぜんがくの二道だうより得來えきたりし賜たまひであつた。云々うんく

乃すなはち起たつて自ら修業しゆげふせねば、この心境しんきやうには達たつせられぬ。併しかしそれは一通りとほ

や二通りとほの骨折ほねをりではない。